

# 通帳の功罪

照一隅

点々

ある民放のクイズ番組の問題。

「公立図書館が子どもの読書離れ対策として、図書カードを『ある物』に替えたところ、児童書の貸し出しが大幅に増加しました。さて『ある物』とは何でしょう」

答えは「読書通帳」。放映では、館内にATMのような機械を設置し、そこに読書通帳を入れると、日付、本の名前、本の価格が印字される仕組みを紹介していた。本を読むほど通帳が埋まっていき、読書意欲を促す。親や友達に自慢したくなるし、通帳を持つと大人のような気分になるだろう。子どもの心理を見事についた手法だと感心した。

同時に、日本人の「通帳好き」DNAが、子どもたちに強く継承されていることに驚かされた。日本人は、高齢者を中心に通帳選好が強い。ただ、金融機関側から見ると、通帳にはさまざまなコストがかかる。例えば、耐性の強い用紙やバーコードの費用のほか、銀行には印紙税（200円）もかかる。通帳記入機能の付加により、ATMの製造・維

持費用も割高になる。規制金利時代に十分な預金運用利ざやが確保されていた名残から、通帳は原則無料だが、今や金融機関の利ざやは極めて薄い。こうした中で、多くの金融機関がインターネットで残高や取引履歴を閲覧する「通帳レス預金」を提

供しているが、まだまだ通帳付き預金は多い。通帳の使用はエコでない上、紛失した場合に悪用されるリスクもある。

金融機関が、通帳を廃止しないし大幅に削減するにはどうしたらよいだろうか。

第一に、デジタル技術を活用して通帳レス預金の利便性を向上させ、パソコンやスマホを使える顧客の預金は全て通帳レスに誘導する。例えばデータ閲覧期間を長期化するとか、家計簿アプリと連携して複数口座の残高を把握可能にする。高齢者には、セキュリティを確保した上で、音声認識AIが電話での残高照会に素早く答えるようにする（現状のテレホンバンキングは、何度も入力を繰り返さねばならず、高齢者が使いに

くい）。

第二に、通帳を希望する顧客からは、相応の通帳代金を徴収する。通帳レス預金の利便性を高めても、通帳使用にコスト負担が伴わないと顧客行動は変わるまい。

第三に、休眠預金制度の周知。休眠預金とは過去10年間に全く口座の異動がない預金で、本年初から制度上発生している。休眠預金になると、預金保険機構に移管され民間公益活動に利用される（所定の手続きにより預金者の事後的な資金回収は可能）。本制度を顧客に周知し、不要な預金口座の解約を促してはどうか。日本の人口は1・2億人だが、預金口座数は12億ともいわれており、毎年1200億円もの休眠預金が事実上発生する状況は異常だ。不要口座の解約により、通帳付き口座の総数を減少させることができる。

冒頭に紹介した読書通帳は優れものだが、使用期間は一定年齢までに制限すべきだと思う。読書好きな子どもが大人になっても、預金通帳好きにならないことを願う。